

# 蘆声

幸田露伴

青空文庫



今を距ること三十余年も前の事であつた。

今において回顧すれば、その頃の自分は十二分の幸福というほどではなくとも、少くも安康の生活に浸つて、朝夕を心にかかる雲もなくすがすがしく送つていたのであつた。

心身共に生氣に充ちていたのであつたから、毎日の朝を、まだ薄靄が村の田の面や畔の樹の梢を籠めてゐるほどの夙さに起出て、そして九時か九時半かという頃までには、もう一家の生活を支えるための仕事は終えてしまつて、それから後はおちついた寛やかな気分で、読書や研究に従事し、あるいは訪客に接して談論したり、午後の倦んだ時分には、そこらを散策したりしたものであつた。

川添いの地にいたので、何時となく釣魚の趣味を合点した。何時でも覚えたてといふものは、それに心の惹かれることの強いものである。丁度その頃一竿を手にして長流に対する味を覚えてから一年かそこらであつたので、毎日のように中川べりへ出かけた。中川沿岸も今でこそ各種の工場の煙突や建物なども見え、人の往来も繁く人家も多くなつてゐるが、その時分は隅田川沿いの寺島や隅田の村でさえさほどに賑やかでは

なくて、長閑のどかな別荘地的の光景を存していたのだから、まして中川沿い、しかも平井橋ひらいばしから上の、奥戸おくど、立石たていしなんどというあたりは、まことに閑寂かんじゃくなもので、水ただ緩ゆるやかに流れ、雲ただ静かに屯たむろしているのみで、黄茅白蘆こうぼうはくろの洲渚しゅうしよ、時に水禽すいきんの影を看るに過ぎぬというようなことであった。釣つりも釣でもおもしろいが、自分はその平野の中の緩い流れの附近の、平凡といえれば平凡だが、何ら特異のこともない和易安閑わいあんたる景色を好もしく感じて、そうして自然に抱いだかれて幾時間を過すのを、東京のがやがやした綺羅きらびやかな境界きょうがいに神経を消耗しょうこうさせながら享受する歓楽などよりも遙はるかに嬉うれしいことと思つていた。そしてまた実際において、そういう中川べりに遊行ゆぎようしたり寝転んだりして魚うおを釣つたり、魚の来ぬ時は拙せつな歌の一句半句でも釣り得てから帰つて、美しい甘い輕微うまの疲労から誘われる淡い清らかな夢に入ることが、翌朝のすがすがしい眼覚めといきいきした力とになることを、自然不言不語ふげんふごに悟らされていた。

丁度秋の彼岸ひがんの少し前頃のことだと覚えていて。その時分毎日のように午後ごごの二時半頃から家を出いでては、中川べりの西袋にしぶくろというところへ遊びに出かけた。西袋も今はその辺に肥料会社などの建物が見えるようになり、川の流れのさまも土地の様子も大おおに変化おおいしたが、その頃はあたりに何があるでもない江戸がたの一曲湾いちきよくわんなのであった。中川は四

十九曲じゅうくまがりといわれるほど、蜿蜒えんえん屈曲して流れる川で、西袋は丁度西の方、即ち江戸の方  
 面へ屈曲し込んで、それからまた東の方へ転じながら南へ行くところで、西へ入って袋の  
 如くになつてゐるから西袋という称しょうも生じたのであろう。水は湾 《わんわん》と曲り込  
 んで、そして転折して流れ去る、あたかも開いた扇の左右の親骨を川の流れと見るならば  
 その蟹目かにめのところかが即ち西袋である。そこで其処そこは釣つり綸いとを垂れ難い地ではあるが、魚は  
 立廻ることの多い自然に岡釣おかづりの好適地である。またその堤防の草原くさはらに腰を下して眸ひとみを  
 放てば、上流からの水はわれに向つて来り、下流の水はわれよりして出づるが如くに見え  
 て、心持の好い眺めである。で、自分は其処そこの水際みずぎわに蹲うずくまつて釣つたり、其処そこの堤てい上じょう  
 に寝転がつて、たまたま得た何かを雑記帳に一行二行記しついたりして毎日たのし染んだ。特に  
 その幾日というものは其処そこで好い漁をしたので、家を出る時には既に西袋の景を思おもひうか  
 べ、路を行く時にも早く雲影うんえい水光すいこうのわが前まへにあるが如き心地さえたのであつた。

その日も午前から午後へかけて少し頭の疲れる難読の書を読んだ後であつた。その書を  
 机上じやうしやに閉じて終つて、半盞はんさんの番茶を喫きつり了りょうし去つてから、

また行つてくるよ。

と家内に一言いちごんして、餌桶えさおけと網魚籠あみびくとを持って、鰐つばひろ広の小麦藁帽おむぎわらぼうを引冠ひつかぶり、腰

に手拭、懐に手帳、素足に薄くなつた薩摩下駄、まだ低くならぬ日の光のきらきらする中を、黄金色に輝く稲田を渡る風に吹かれながら、少し熱いとは感じつつも爽やかな気分です歩き出した。

川近くなつて、田舎道の辻の或腰掛茶店に立寄つた。それは藤の棚の茶店といつて、自然に其処にある古い藤の棚、といつてさまで大きくもないが、それに店の半分は掩われているので人にそう呼びならされている茶店である。路行く人や農夫や行商や、野菜の荷を東京へ出した帰りの空車を挽いた男なんどのちよつと休む家で、いわゆる三文菓子で少しに、余り渋くもない茶よりほか何を提供するのでもないが、重宝になつている家なのだ。自分も釣の往復りに立寄つて顔馴染になつていたので、岡釣に用いる竿の継竿とはいえ三間半もあつて長いのをその度《たびたび》に携えて往復するのは好ましくないから、此家へ頼んで預けて置くことにしてあつた。で、今行掛に例の如く此家へ寄つて、

やあ、今日は、また来ました。

と挨拶して、裏へ廻つて自ら竿を取出して網と共に引担いで来ると、茶店の婆さんは、おたのしみなさいまし。好いのが出ましたら些御福分けをなすつて下さいまし。

と笑つて世辞をいつてくれた。その言葉を背中に聴かせながら、

ああ、宜いとも。だがまだボク釣師だからね、ハハハ。

と答えてサツサと歩くと、

でもアテにして待つてますよ、ハハハ。

と背後から大きな声で、なかなか調子が好い。世故に慣れているというまででなくとも善良の老人は人に好い感じを持たせる、こういわれて悪い気はしない。駄馬にも篠の鞭、という格で、少しは心に勇みを添えられる。勿論未熟者という意味のボク釣師と自ら言つたのは謙遜的で、内心に下手釣師と自ら信じている釣客はないのであるし、自分もこの二日ばかりは不結果だったが、今日は好い結果を得たいと念じていたのである。

場処へ着いた。と見ると、いつも自分の坐るところに小さな児がチャンと坐つていた。汚れた手拭で頬冠りをして、大人のような藍の細かい縞物の筒袖単衣の裾短なものの汚れかえつていゝのを着て、細い手脚の渋紙色なのを貧相にムキ出して、見すばらしく蹲んでいるのであった。東京者ではない、田舎の此辺の、しかも余り宜い家でない家の児であるとは一目に思い取られた。髪の毛が伸び過ぎて領首がむさくなつていゝのが手拭の下から見えて、そこへ日がじりじり当つていゝので、細い首筋の赤黒いところに汗

が沸えてでもいるように汚らしく少し光っていた。傍へ寄つたらポンと臭そうに思えたのである。

自分は自分のシカケを取出して、穂竿の蛇口に着け、釣竿を順に続いて釣るべく準備した。シカケとは竿以外の綸その他の一具を称する釣客の語である。その間にチヨイチヨイ少年の方を見た。十二、三歳かと思われたが、顔がヒネてマせて見えるのでそう思うのだが、実は十一か高 《たかだか》十二歳位かとも思われた。黙つてその児はシンになつて浮子を見詰めて釣っている。潮は今ソコリになつていてこれから引返そうということころであるから、水も動かず浮子も流れないが、見るとその浮子も売物浮子ではない、木の箸か何ぞのようなものを、明らかに少年の手わざで、釣糸に徳利むすびにしたのに過ぎなかつた。竿も二間ばかりしかなくて、誰かのアガリ竿を貰いか何ぞしたのであるうか、穂先が穂先になつてない、けだし頭が三、四寸折れて失せて終つたものである。

この児は釣に慣れていない。第一此処は浮子釣に適していない場である。やがて潮が動き出せば浮子は沈子が重ければ水に撓られて流れて沈んで終うし、沈子が軽ければ水と共に流れて終うであろう。また二間ばかりの竿では、此処では鉤先が好い魚の廻るべきところには達しない。岸近に廻るホソの小魚しか鉤には来らぬであろう。とは思つたが、

それは小児こどもの釣であるとすればとかくを言うにも及ばぬことであるとして看過すべきであるから宜よい。ただ自分に取つて困つたことはその兎の居場いばしよ処であつた。それは自分が坐りたい処である。イヤ坐らねばならぬところである、イヤ当然坐るべきところである、ということであつた。

自分が魚餌えさを鉤はりに装はりいつけた時であつた。偶然に少年は自分の方に面おもてを向けた。そして紅桃こうとう色をしたイトメという虫を五匹や六匹ではなく沢山に鉤に装うところを看詰みつめていた。その顔はただ注意したというほかに何の表情があるのではなかつた。しかし思いのほかに目鼻立めはなだちの整つた、そして怜悧りこうだか氣象が好いか何かは分らないが、ただ阿呆あほげてはいない、狡こすいか善良かどうかは分らないが、ただ無茶ではない、ということだけは読取よみとれた。

少し氣の毒なような感じがせぬではなかつたが、これが少年でなくて大人であつたなら疾とつくに自分は言出すはずのことだつたから、仕方がないと自分に決めて、

兄さん、濟まないけれどもネ、お前の坐つているところを、右へでも左へでも宜いから、一間半か二間ばかり退どいておくれでないか。そこは私が坐るつもりにしてあるところだから。

と、自分では出来るだけ言葉を柔しくして言ったのであった。

すると少年の面上には明らかに反抗の色が上った。言葉は何も出さなかったが、眼の中には威をあらわした。言葉が発されたなら明らかにそれは拒絶の言葉でなくて、何の言葉がその眼の中の或物に伴なおうやと感ぜられた。仕方がないから自分は自分の意を徹しようとするために再び言葉を費さざるを得なかった。

兄さん、失敬なことを言う勝手な奴だと怒ってくれないでくれ。お前の竿の先の見当の真直のところを御覧。そら彼処に古い「出し杭」が列んで、乱杭になつていろう。その中の一本の杭の横に大きな南京釘が打つてあるのが見えるだろう。あの釘はわたしが打つたのだよ。あすこへ釘を打つて、それへ竿をもたせると宜いと考えたので、わたしが家から釘とげんのうとを持って来て、わざわざ舟を借りて彼処へ行つて、そして考え定めたところへあの釘を打つたのだよ。それから此処へ来る度にわたしはあの釘へわたしの竿を掛けてあの乱杭の外へ鉤を出して釣るのだよ。で、また私は釣れた日でも釣れない日でも、帰る時にはきつと何時でも持つて来た餌を土と一つに捏ね丸めて炭団のようにして、そして彼処を狙つて二つも三つも抛り込んで帰るのだよ。それは水の流れの上下に連れて、その土が解け、餌が出る、それを魚が覚えて、そして自然に魚を其処へ廻つて

来させようというためなのだよ。だからこういう事をお前に知らせるのは私に取って得なことではないけれども、わたしがそれだけの事を彼処に對してしてあるのだから、それが解つたらわたしに其処を譲つてくれても宜いだろう。お前の竿では其処に坐つていても別に甲斐があるものでもないし、かえつて二間ばかり左へ寄つて、それ其処に小さい渦が出来ているあの渦の下端を釣つた方が得がありそうに思うよ。どうだね、兄さん、わたしはお前を欺すのでも強いるのでもないのだよ。たつてお前が其処を退かないというのなら、それも仕方はないがね、そんな意地悪にしなくても好いだろう、根が遊びだからネ。

と言つて聴かせている中に、少年の眼の中は段に平和になつて来た。しかし末に至つて自分は明らかにまた新に失敗した。少年は急に不機嫌になつた。

小父さんが遊びだとして、俺が遊びだとは定つてやしない。

と癪に触つたらしく投付けるようにいつた。なるほどこれは悪意で言つたのではなかったが、己を以て人を律するといふもので、自分が遊びでも人も遊びと定まつている理はないのであつた。公平を失つた情懷を有つていなかつた自分は一本打込まれたと是認しない訳には行かなかつた。が、この不完全な設備と不満足な知識とを以て川に臨んでいる少年の振舞が遊びでなくてそもそも何であろう。と驚くと同時に、遊びではないといつても

遊びにもなつておらぬような事をしていながら、遊びではないように高飛車に出た少年のその無智無思慮を自省せぬ点を憫笑せざるを得ぬ心が起ると、殆どまた同時に引続いてこの少年をして是の如き語を突嗟に発するに至らしめたのは、この少年の鋭い性質からか、あるいはまた或事情が存在して然らしむるものあつてか、と驚かされた。

この驚愕は自分をして当面の釣場の事よりは自分を自分の心裏に起つた事に引付けたから、自分は少年との応酬を忘れて、少年への観察を敢てするに至つた。

参つた。そりやそうだった。何もお前遊びとは定まっていなかつたが……

と、ただ無意識で正直な挨拶をしながら、自分は凝然と少年を見詰めていた。その間に少年は自分が見詰められているのも何にも気が着かないのであろう、別に何らの言語も表情もなく、自分の竿を挙げ、自分の坐をわたしに譲り、そして教えてやつた場処に立つて、その鉤を下した。

ヤ、有難う。

と自分は挨拶して、乱杭のむこうに鉤を投じ、自分の竿を自分の打つた釘に載せて、静かに竿頭を眺めた。

少年も黙っている。自分も黙っている。日の光は背に熱いが、川風は帽の下にそよ吹く。

堤後の樹下に鳴いているのだろう、秋蟬の声がしおらしく聞えて来た。

潮は漸く動いて来た。魚はまさに来らんとするのであるがいまだ来ない。川向うの蘆洲からバン鴨が立って低く飛んだ。

少年はと見ると、干極と異なつて来た水の調子の変化に、些細の板沈子と折箸の浮き子とでは、うまく安定が取れないので、時 竿を挙げては鉤を打返している。それは座を易えたためではないのであるが、そう思つていられると思うと不快で仕方がない。で、自分は声を掛けた。

兄さん、此処は潮の突掛けて来るところだからネ、浮子釣ではうまく行かないよ。沈子釣におしよ。

浮子釣では釣れないかい。

釣れないとは限らないが、もう少し潮が利いて来たら餌がフラフラし過ぎるし、釣づらくて仕方がないだろう。

今でも釣りづらいよ。

そうだろう。沈子を持つていないなら、此処へおいで。沈子もあげようし、シカケも直してあげよう。

沈子をくれる？

ああ。

自分の気持も坦夷で、決して親切でないものではなかった。それが少年に感知されたからであろう、少年も平和で、そして感謝に充ちた安らかな顔をして、竿を挙げてこちらへやって来た。はじめてこの時少年の面貌風采の全幅を目にして見ると、先刻からこの少年に対して自分の抱いていた感想は全く誤っていて、この少年もまた他の同じ位の年齢の児童と同様に真率で温和で少年らしい愛らしい無邪気な感情の所有者であり、そしてその上に聡明さのあることが感受された。その眼は清らかに澄み、その面は明らかに晴れていた。自分は小囊から沈子を出して与え、かつそのシカケを改めて遣うとした。ところが少年は、

いいよ、僕、出来るから。

といって、自らシカケを直した。一通りの沈子釣の装置の仕方ぐらいは知っているのであったが、沈子のなかつたために浮子釣をしていたのであったことが知られた。

少年の用いていた餌はけだし自分で掘取つたらしい蚯蚓であったから、聊かその不利なことが気の毒に感じられた。で、自分の餌桶を指示して、

この餌を御使いよ、それでは魚の中りが遠いだろうから。

少年は遠慮した様子をちよつと見せたが、それでも餌の事も知っていたと見えて、嬉しそうな顔になつて餌を改めた。が、僅に一匹の虫を鉤に着けたに過ぎなかつたから、もつとお着け、魚は餌で釣るのだからネ。

少年はまた二匹ばかり着け足した。

今まで何処で釣つていたのだい、此処は浮子釣りなんぞでは巧く行かない場だよ。

今までは奥戸の池で釣つてたよ、昨日も一昨日も。

釣れたかい。

ああ、鮒が七、八匹。

奥戸というのは対岸で、なるほどそこには浮子釣に適すべき池があることを自分も知つていた。しかし今時分の鮒を釣つても、それが釣という遊びのためでなくって何の意味を為そう。桜の花頃から菊の花過ぎまでの間の鮒は全く仕方のないものである。自分には合点が行かなかつたから、

遊びじゃないように先刻お言いだつたが、今の鮒なんか何にもなりはしない、やつぱり遊びじゃないか。

というと、少年は急に悲しそうな顔をして気色を曇らせたが、

でも僕には鮒のほかのものは釣れそうに思えなかったからネ。お相撲さんの舟に無銭で乗せてもらって往還りして彼処で釣ったのだよ。

無銭で乗せてもらっての一語は偶然にその實際を語ったのだろうが、自分の耳に立つて聞えた。お相撲さんというのは、当時奥戸の渡船守をしていた相撲上りの男であったのである。少年の談の中には裏面に何か存していることが明白に知られた。

そうかい。そしてまた今日はどうして此処へ来たのだい。

だつてせつかく釣つて帰つても、今小父さんの言つた通りにネ、昨日は、こんな鮒なんか不味くて仕様がな、も少し気の利いた魚でも釣つて来いって叱られたのだもの。

誰に。

お母さんに。

じゃお母さんに吩咐られて釣に出ているのかい。

アア。下らなく遊んでいるより魚でも釣つて来いッてネ。僕下らなく遊んでいたんじゃない、学校の復習や宿題なんかしていたんだけれど。

ここに至つて合点が出来た。油然として同情心が現前の川の潮のように突掛けて

来た。

ムムウ。ほんとお母さんじゃないネ。

少年は吃驚して眼を見張つて自分の顔を見た。が、急に無言になつて、ポツクリちよつと頭を下げて有難うという意を表したまま、竿を持つて前の位置に歸つた。その時あたかも自分の鉤に魚が中つた。型の好いセイゴがあがつて来た。

少年は羨ましそうに予の方を見た。

続いてまた二尾、同じようなのが鉤に来た。少年は焦るような緊張した顔になつて、羨しげに、また少しは自分の鉤に何も来ぬのを悲しむような心を蔽いきれずに自分の方を見た。

しばらく彼も我も無念になつて竿先を見守つたが、魚の中りはちよつと途断えた。

ふと少年の方を見ると、少年はまじまじと予の方を見ていた。何か言いたいような風であつたが、談話の緒を得ないというのらしい、ただ温和な親しみ寄りたいたいが如き微笑を幽に湛えて予と相見た。と同時に予は少年の竿先に魚の来たのを認めた。

ソレ、お前の竿に何か来たよ。

警告すると、少年は慌てて向直つたが早いか敏捷に巧い機に竿を上げた。かなり重い魚

であつたが、引上げるとそれは大きな鮒であつた。小さい畚ふじにそれを入れて、川柳の細い枝を折取つて跳出はねださぬように押え蔽つた少年は、その手を小草おぐさでふきながら予の方を見て、小父おじさん、また餌をくれる？

と如何にも欲しそうに言つた。

アア、あげる。

少年は竿を手にして予の傍かたえへ来た。

好いい鮒だつたネ。

よくつても鮒だから。せつかく此処ここへ来たんだけれどもネエ。

と失望した口ぶりには、よくよく鮒を得たくない意こころで胸が一パイいっになつてゐるのを現わしていた。

どうもお前の竿では、わんどの内側しか釣れないのだから。

と慰めてやつた。わんどとは水の彎曲した半円形をいうのだ。が、かえつてそれは少年に慰めにはならず決定的に失望を与えたことになつたのを気づいた途端に、予の竿先は強く動いた。自分はもう少年には構つていられなくなつた。竿を手にして、一心に魚のシメ込こみうかがを候つた。魚は式かたの如くにやがて喰く総いしめた。こつちは合せた。むこうは抵抗した。竿は

月の如くになった。綸は鉄線の如くになった。水面に小波は立った。次いでまた水の綾が乱れた。しかし終に魚は狂い疲れた。その白い平を見せる段になってとうとうこつちへ引寄せられた。その時予の後にあつて網を何時か手にしていた少年は機敏に突とその魚を撈つた。

魚は言うほどもないフクコであつたが、秋下りのことであるし、育ちの好いのであつたから、二人の膳に上十分に足りるものであつた。少年は今も羨みの色よりも、ただ少年らしい無邪気の喜色に溢れて、頬を染め目を輝かして、如何にも男の兎らしい美しさを現わしていた。

それから続いて自分は二尾のセイゴを得たが、少年は遂に何をも得なかつた。

時は経つた。日は堤の陰に落ちた。自分は帰り支度にかかつて、シカケを収め、竿を収めはじめた。

少年はそれを見ると、

小父さんもう帰るの？

と予に力ない声を掛けたが、その顔は暗かつた。

アア、もう帰るよ。まだ釣れるかも知れないが、そんなに慾張つても仕方はないし、潮

も好いところを過ぎたからネ。

と自分は答えたが、まだ余っている餌を、いつもなら土に和あえて投げ込むのだけれど、今日はこの児こに遺のこそうかと思つて、

餌が余っているが、あげようか。

といった。少年は黙つて立つてこちらへ来た。しかし彼は餌を盛るべき何物をも持つていなかった。彼は古新聞紙の一片に自分の餌を包くるんで来たのであつたから。差当つて彼も少年らしい当惑の色を浮めたが、予にも好い思案はなかつた。イトメは水を保つに足るものの中に入れて置かねば面白くないのである。

やっぱり小父おじさんが先刻さつき話したようにした方が宜いい。明日あしたまた小父さんに遇あつたら、小父さんその時に少しおくれ。

といつて残り惜しそうに餌を見た彼の素直な、そして賢い態度と分別は、少からず予を感じさせた。よしんば餌入れがなくて餌を保てぬにしても、差当り使うだけ使つて、そこらしまに捨てて終しまいそうなるものである。それが少年らしい当然な態度でありそうなるものであらねばならぬのである。

お前も今日はもう帰るのかい。

アア、夕方のいろんな用をしなくてはいけないもの。

夕方の家事雑役をするということは、先刻さつきの遊びに釣つをするのでないという言葉に反映し合つて、自分の心を動かさせた。

ほんとのお母さんつかでないのだネ。明日あすの米を磨すいだり、晩の掃除をしたりするのだネ。彼はまた黙つた。

今日も鮒びきを一尾ばかり持つて帰つたら叱なぐられやしないかね。

彼は黯あんぜん然ぜんとした顔になつたが、やはり黙もくつていた。その黙もくつているところがかえつて自分の胸うちの中に強い衝動を与えた。

お父さんとつはいるのかい。

ウン、いるよ。

何なにをしているのだい。

毎日かめあり亀あり有ありの方へ通つて仕事している。

土工かあるいはそれに類した事ことをしているものと想像された。

お前のお母さんつかは亡なくなつたのだネ。

ここに至つてわが手は彼の痛處つうじよに触れたのである。なお黙もくつてはいたが、コツクリと

點頭して是認した彼の眼の中には露が潤んで、折から真赤に夕焼けした空の光りが華  
《はなばな》しく明るく落ちて、その薄汚い頬被りの手拭、その下から少し洩れている  
額のぼうぼう生えの髪さき、垢じみた赭い顔、それらのすべてを無残に暴露した。  
お母さんは何時亡くなったのだい。

去年。

といった時には、その赭い頬に涙の玉が稲葉をすべる露のようにポロリと滾転し下つて  
いた。

今のお母さんはお前をいじめるのだナ。

ナーニ、俺が馬鹿なんだ。

見た訳ではないが情態は推察出来る。それなのに、ナーニ、俺が馬鹿なんだ、というこ  
の一語でもって自分の問に答えたこの児の気の動き方というものは、何という美しさであ  
ろう、我恥かしい事だと、愕然として自分は大に驚いて、大鉄鎚で打たれたような気が  
した。釣の座を譲れといつて、自分がその訳を話した時に、その訳がすらりと呑込めて、  
素直に座を譲ってくれたのも、こういう児であつたればこそと先刻の事を反顧せざるを得  
なくもなり、また今残り餌を川に投げる方が宜いといつたこの児の語も思合されて、

田野の間にもこういう性質の美を持って生れる者もあるものかと思うと、無限の感が湧起せずにはおられなかつた。

自分はもう深入りしてこの児の家の事情を問うことを差控えるのを至当の礼儀のように思つた。

では兄さん、この残り餌を土で団めておくれでないか、なるべく固く団めるのだよ、そうしておくれ。そうしておくれなら、わたしが釣つた魚を悉皆でもいくらでもお前の宜いだけお前にあげる。そしてお前がお母さんに機嫌を悪くされないように。そうしたらわたしは大へん嬉しいのだから。

自分は自分の思うようにすることが出来た。少年は餌の土団子をこしらえてくれた。自分はそれを投げた。少年は自分の釣つた魚の中からセイゴ二尾を取つて、自分に対して言葉は少いが感謝の意は深く謝した。

二人とも土堤へ上つた。少年は土堤を川上の方へ、自分は土堤の西の方へと下りる訳だ。別れの言葉が交された時には、日は既に収まって、夕風が袂涼しく吹いて来た。少年は川上へ堤上を辿つて行つた。暮色は漸く逼つた。肩にした竿、手にした畚、筒袖の裾短かな頼冠り姿の小さな影は、長い土堤の小草の路のあなたに段々と小さくなつて行く。然

たるその様。自分は少時しばらく立って見送っていると、彼もまたふと振返ってこちらを見た。自分を見て、ちよつと首かしらを低くして挨拶したが、その眉目びもくは既に分ぶん明みょうには見えなかった。五位ごい鷺さぎがギヤアと夕空を鳴いて過ぎた。

その翌日あしたも翌日あしたも自分は同じ西袋へ出かけた。しかしどうした事かその少年に復ふたびた会うことはなかった。

西袋の釣つりはその歳とし限りぎでやめた。が、今でも時ときその日その場の情景を想い出す。そして現社会の何処どこかにその少年が既に立派な、社会に対しての理解ある紳士となつて存在しているように想えてならぬのである。

(昭和三年十月)

## 青空文庫情報

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第四卷」岩波書店

1953（昭和28）年3月刊

※「裾短」と「裾短」の混在は、底本通りです。

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2007年11月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 蘆声

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>